

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530874

研究課題名（和文） 探求的学びを実現する保育実践とその教育課程に関する研究

研究課題名（英文） A Study on Practice of Preschool Education Leading to Inquiry Learning and its Curriculum

研究代表者

西城 裕子（磯部 裕子）(SAIJO HIROKO) (ISOBE HIROKO)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：50289740

研究成果の概要（和文）：保育における教育課程の理論は、これまで小学校以上の学校教育の教育課程の理論と方法に準じた形で理解されてきた。しかし、保育における実践は、小学校以上の教科教育と異なり、幼児の主体的な体験(遊び)を中心とする生活によって教育する方法をとっている。よって、このような実践においては、教師がすべての教育内容を事前に計画し、その計画に従って実践を進めるのではなく、子どもと共に生活を作りだし、それを生かす教育課程をデザインしていく必要がある。子どもが生活者として自らの生活を作り出すとき、子どもは生活に埋め込まれた課題を探求しようとする。その探求のプロセスにある学びを構造化することで、保育という実践の教育課程が生成する。

研究成果の概要（英文）：The curriculum theory in preschool education has been understood according to the curricula and educational methods for school education. But, the practice of preschool education is carried out by a method through children's living activities mainly consisting of their subjective experiences like playing. Therefore, for teachers of preschool education, it is necessary to make a plan for each content of education and design a curriculum through coming up with ideas to create children's daily living with them, but not only putting the plan in practice. When a child creates own daily life as a living person, he/she tries to solve various tasks buried in life. The curriculum for preschool education would be realized by organizing the respective learning in the inquiry process of daily living.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育課程、保育、臨床、学び、質的研究

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

教育課程の理論と方法については、昨今世界的な見直しが進められている。それは、総合的な学習のような教科教育とは異なる学習への注目によって、学習とは何か、学ぶとは何か、という根本的な問いに立ち戻る必要が生じたことによる。

教科教育は、基本的にはその学習すべき内容が事前に決められており、しかも多くの場合、系統的に整理されてあることから、教師は学習内容を理解し、「いつ、何を、どのように教えるか」を計画すればよいことになる。それに対して、総合的な学習は、教育内容があらかじめ決められていないため、これまでの「教育の内容と方法を計画する」という教師のアプローチは、意味をもちにくい。総合的な学習は、これまでの教科概念とは根本的な異なる学習概念であるからである。

保育実践は、いわば総合的な学習である。「幼稚園教育要領」では、5領域によって、その教育内容の指針を示しているが、同時に幼稚園の教育実践はこれらの領域のねらいが総合的に達成されるものであることも指摘している（文部科学省「幼稚園教育要領」第1章 総則）。

したがって、保育においては、教科教育に準じた教育課程のあり方は、これに適さないことは明らかである。にもかかわらず、わが国の保育においては、その理論の検討が進められないままに、教科教育的な教育課程の編成に準じる形で、この理論に基づく教育課程が編成されてきた。したがって、教育課程の理論とその実践の間に齟齬が生まれ、教育課程が形骸化する傾向にあった。

学習観に対する見直しとその研究によって進められている昨今の教育課程の研究により、わが国の保育における教育課程の理論と方法の課題が明らかになりつつある。こうした状況を踏まえ、わが国の保育の教育課程は、その理論と方法の課題を整理し、実践に生きる教育課程のあり方を臨床的に研究していくことが求められている。

本研究は、これらの背景を踏まえ、進めるものである。

2. 研究の目的

わが国の保育における教育課程は、これまで小学校以上の学校教育の教育課程の理論と方法に準じる形で理解されてきた。しかし、わが国の保育の実践は、小学校教育以上の教科教育とは異なり、幼児の主体的な体験（遊び）を中心とする生活によって教育する方法

をとっている。よって、このような実践においては、教師がすべての教育内容を事前に計画し、その計画に準じて実践を進めるのではなく、子どもと共に生活を作りだし、教育課程をデザインしていく必要がある。保育は、言うまでもなく、意図的な営為であるから、子どもの生活の中にある体験は、単なる体験の羅列にとどまるものであってはならない。

この課題へのアプローチとして、本研究は、保育臨床の場における幼児の「体験（経験）」とは何なのかを明らかにすることからはじめる。幼児教育の実践は、生活を通して行う。したがって、生活における「体験（経験）」の意味が重要なものとなる。「教科か経験か」「生活か科学か」という議論は、わが国の教育史において長く議論されてきたテーマであるが、保育は、生活を通して行い、直接的な体験を通して実践をすすめるものである。しかし、かつて新教育運動が批判されたように、それが体験の羅列（いわゆる体験主義）であっては意味がない。体験が子どもにとって意味を生成し、「学び」を実現する必要がある。学びが実現する体験とは何なのか。本研究では、それは、生活のなかにある活動において、子ども自身が問題を発見し、他者と協同して探求していくプロセスの中にあると仮定する。

そこで、本研究は、探究的な学びを実現する体験とは何か、子どもの学びが内包する生活とは何かを検証し、それらが連なるものとしての教育課程とは何かを研究する。

3. 研究の方法

本研究の研究方法は、(1)フィールドにおける事例収集 (2)事例の言語化と整理、分析 (3)事例の理論化と検証の3段階で進める。

(1)の事例収集は、これまで進めてきた地域の実践、共同研究フィールドの事例整理とともに、質的研究の根拠となりうる国内の特色ある実践の事例、海外の事例収集をする。

(2)については、事例の言語化の方法論とあわせて検証を進める。研究対象とする実践の記録（映像、言語）をとりながら、実践者と共によりフレクシオンし、それぞれの実践の意味を検証する。量的な検証では見えてこない保育臨床を質的研究のアプローチを使いながら、実践の意味を整理する。したがって、本研究では、質的研究の方法論についてもあわせて検証する。

(3)については、研究の後半に、事例に基づき教育課程のデザインを描き、それをひとつの仮説として、その実践において子どもの学

びが実現しているのか、それをどのように評価するのかを検証し、教育課程とともに再考する。

4. 研究成果

研究期間中に収集した実践データ（言語・映像）を元に、子どもの学びの深化を実践者とともに検証を進めた。それにより、以下のことが明らかとなった。

① これまでの保育の計画は、教師が子どもの姿を予想して活動内容を事前に計画することが多く、それは「よりよい」展開を期待しての計画であった。その際の、「よさ」は、教師側が予想するスムーズな展開や、実践後の結果を高めることを期待してのものであった。しかし、保育は、「成果」としての結果を重視する営為ではなく、プロセスの中での経験の質を重視する実践である。教師が計画しめざす「よさ」とは、スムーズな展開や結果ではなく、子どもの体験の質である。したがって、子どもの体験の質を高めるための計画が必要となる。

② 子どもの体験の質をどのように測るかということが、重要な課題となる。体験の質は、量的、質的の双方から検証していくことが必要であるが、本研究では、幼児の生活を検証することは、個別具体的な臨床の検証であることから、量的な側面から見えてこない質的な側面を重視する必要があることから、質的研究法に基づき実践を検証した。体験の質を読み取る際、学びの実現という指標から、見ることによって検証をすすめた。

③ 幼児の生活や遊びは、体験を通して実現する。その体験が学びを実現するには、体験が一過性のものでなく、体験と体験がつながり、それにより子どものさらなる興味が深まり、他の体験を呼び起こしていくような遊びであることが必要である。その意味で、体験の中で、問題を発見し、他者と協同して探求していく、いわゆるプロジェクト型保育は、意味ある実践であるといえる。

④ 本研究では、このプロジェクト型保育、あるいはそれに類する実践を検証し、そこでの学びを教育課程に描くことの可能性を検証した。

以下に調査対象の幼稚園での事例を記載し、その検証結果を記載する。

【事例① Die Waldläufer ドイツ】

Die Waldläufer は、いわゆるベルリン郊外パンコー地区にある森の幼稚園である。森の幼稚園の実践は、昨今、ヨーロッパ各地で注目されているが、そこに共通する事項は、
・十分な生活空間としての園舎を持たない（極端な気象条件に備えた避難場所としての空間は用意されている）

・毎日、保育時間の多くを自然のなかですぐす。

・少人数保育である。
などであり、自然の中での過ごし方については、多様な実践が行われている。

ここでは、Die Waldläufer の教育方法をもとに、体験の質と教育課程の関係について論じる。

Die Waldläufer の資料によると、本園の教育方法の特徴は、以下のようなものである。

- ・自然を教育者とする。
- ・空間的な制限を設けず、動きを妨げない。
- ・子ども自身が観察し、調査し、探求し、そして実験する。
- ・既成の遊び道具を設けない。
- ・活動に決まりを設けない。
- ・子どもたちがあらゆる生活場面において、自分で決定したり、協同で決定したりする。
- ・自由な遊びが中心となる。
- ・保育者が適切な言葉がけをして、子どもたちの好奇心を持続させる。
- ・共同生活に必要な仕事に子どもたちを参加させる。
- ・自然と共生する人々の暮らしに学ぶ。

このような教育方法による森の幼稚園では、人が計画することのできない自然の森を生活のフィールドとし、教師の計画をいとも簡単に乗り越える幼児自身に向き合う生活を通して、教育する。こうした実践は、これまで自明視されてきた実践の構造であるP(Plan)-D(Do)-(Check)-(Action)の構造とは全く異なるものであり、子どもが学ぶとは何か、という学びの構造そのものにも転換を迫っている。

森で生活する子どもたちが日々出会う事柄は、基礎から応用へと展開するわけでもなく、子どもたちの発達段階に配慮されているわけでもなく、権力によって選択された教育内容でもない。それらは、むしろ系統性や発達段階を無視して子どもたちの前に立ち現れる。子どもたちが興味を抱き、夢中になる世界は、予測不可能であるが、子ども自身が森で出会ったモノ・コトに興味を抱けば、子ども自身の力でそれをどこまでも探求し、挑戦することができる自由が保障されている。こうした体験は、小学校以上の学習を先取りした知の獲得に直結しないが、Die Waldläufer の資料が示しているように、子どもの学びの体験となっている。

例)

- ・時間とともに影が変わることを体験し、それが太陽の動きや時間の経過と関係があることを知る。
- ・松ぼっくりは同じ大きさが同じであっても石より軽いことを知る。

・自然は数を数えたり、ものを比べたりする
たくさんの機会を与えてくれる。⁽¹⁾

【事例② プロジェクト型保育 宮城県】

子どもの体験が一過性のものでなく、体験が連なり、子どもの学びが生成する実践として、昨今注目されているプロジェクト型保育は極めて示唆的である。

以下に本研究で実践的研究を進めたプロジェクト型保育の事例を記し、ここから明らかになった教育課程の可能性を述べる。

□A 男が持ってきたカエルをクラスのみんなで飼いたいという子どもたちの提案がきっかけで、子どもたちのプロジェクトがスタートする。

[プロジェクトのはじまり]

カエルを飼うためには、どんな環境を用意すればいいのか(エサや飼育環境)を知る必要が生まれる(知の必然性)

[知りたいこと・わかりたいことがうまれる] 調べをすすめていると、カエルには様々な種類がいることがわかる。

[わかるという体験]

それぞれのカエルには、それぞれに適切な生活環境がある。

[関心の深まり／やりたいことが増える]

カエルが元気に過ごせるような池を作りたい。

[新たな課題がみえる／課題を乗り越えるための方法を考える]

池を作るにはどうしたらいいか?

設計図を作り、必要な材料を用意する。園庭のどこに作ればいいのか思考する。また作るための場所や必要を計画し、それを実現するために他者に交渉する。

[次々に生まれる課題に向き合う]

シートが必要。しかし、高価。シートを買うために、お金を集めよう。その手段が自分たちには見つからない。

[課題を乗り越えるための方法を考え、協同する]

自分たちで作った米でおにぎりを作って売ろう。(保護者の協力を仰ぐ)

[課題をやりとげる]

池をつくる。専門家の協力を得る。本物に出会う。水を入れて完成させる。

[さらなる探求を進める]

池を維持するための環境を考える。(水、草、他の生き物)

[自分たちの学びをふりかえる：ドキュメンテーション]

一年の活動を楽しみ、絵本にする。

上記のプロジェクト型保育をもとに、教育

課程を考察する視点を整理する。

1. プロジェクトのスタートが子どもの何気ない関心からスタートしている。つまり、教師側が計画・提案したテーマではなく、子どもたちの中から生まれたテーマである。

2. 子どもたちの探求は「知りたい」「わかりたい」という強い欲求に支えられている。

3. ひとつの課題を乗り越えることで、さらなる課題が生まれるが、それが、さらなる「わかりたい」という気持ちに連なっている。

4. 課題が大きくなると、子どもたちはそれらを解決する方法を思考し、協同して解決しようとする。(他者の存在の意味に気づく)

5. 協同的な学びの実践がひろがる。

6. やり遂げることで、さらなる課題がうまれる。

7. 自分たちの学びの履歴としてのドキュメンテーションにより、自分たちの学びを確認し、学びを実感する。

以上の視点から考察すると、教師は、活動の内容を計画するのではなく、学びの内容を計画していることが見えてくる。子どもの「知りたい」「わかりたい」という気持ちの高まりが子どもの新たな課題を引き出し、子どもの体験が深化する。教師は、子どもの体験が深化するプロセスに付き合い、「何をするのか」という体験内容ではなく、「何を学ぶのか」という学びに注目して支援する必要があるため、ここに教師の「計画」が生まれる。

本プロジェクトでは、子どもたち自身が、最後に自分たちの体験を絵本にしようと提案し、全員で一冊の絵本を製作する。この絵本は、自分たちの学びを振り返るためのドキュメンテーションであり、子ども自身の学びの履歴となっている。子ども自身の学びの検証は、次の学びの土台となっていく。

本研究で検証した事例は、学びを実現する体験を連ねた実践である。これらの実践の計画は、体験内容ではなく、学びの内容を計画したものである。こうした計画は、これまでの教師側の「事前の計画」とは、根本的に異なる計画を意味する。

子どもの興味関心からスタートする学びの構造をデザインすることで、「総合的な学び」としての保育実践に生きる教育課程を編成することができる。こうした計画は、子どもの多様に広がる体験をつなぐ計画(見通し)をデザインし、今の体験と学びの物語を評価し直すという繰り返しの中で、作成していく必要がある。その意味で、保育における教育課程の検証を進めるためには、保育における評価の検証が必須である。

したがって、本研究の最終段階としては、保育という営為の評価方法についても、検証

する必要がある。ゴールフリー評価論などの研究は、保育の領域では、いまだ十分な検証がなされていないが、これらの研究は、きわめて示唆的である。

本研究を踏まえ、今後は保育という個別具体的な臨床的実践の教育課程を「評価」という側面から検証し、この研究を継続発展させていく。

註)

(1) 佐藤史浩・磯部裕子「森の幼稚園—教育的な試み—」 宮城学院女子大学 発達科学研究 2011 p. 47

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 磯部裕子 「子どもの元気を再考する—「子どもらしさ」というイメージの中で—」 幼児の教育 第111巻 第2号 2012 pp. 17-20
2. 磯部裕子 「保育内容としての給食の再考」 現代と保育 ひとなる書房 84号 2012 pp. 30-41
3. 佐藤史浩、磯部裕子 「森の幼稚園—教育的な試み—」 宮城学院女子大学 発達科学研究 2011 pp. 43-52 査読有

〔図書〕(計3件)

1. 磯部裕子 保育・教育課程の基礎理論 鈴木昌世・佐藤哲也編『子どもの心によりそう 保育・教育課程論』福村出版 2012 pp.7-19
2. 磯部裕子 「保育におけるカリキュラムの転換」 池田稔研究論集編集委員会『教育人間科学の探求』(共著) 学文社 2011 pp.182-195 査読有
3. 磯部裕子 「幼・保・小の接続期カリキュラムの課題」 木村吉彦監修/仙台市教育委員会『スタートカリキュラムのすべて』 2010 pp.154-159

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西城 裕子(磯部 裕子) (SAIJO HIROKO)
(ISOBE HIROKO)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：50289740